

麗女と馬琴

——歴史物語『池の藻屑』をめぐって——

雲 岡 梓

はじめに

伊勢の文学者荒木田麗女（一七三二～一八〇六）は平安王朝を舞台とする擬古物語や歴史物語、連歌作品等膨大な量の作品を執筆している。代表作は歴史物語の『池の藻屑』と『月の行方』であり、それらは明和八（一七七二）年二月と同年八月に、ほとんど連続して書かれた。

『池の藻屑』は、石山寺で年老いた尼に聞いた昔語りを書き記すという四鏡にならった仮託的構想をとり、後醍醐天皇から後陽成天皇までの歴史を書く。『月の行方』もまた、百歳以上の老翁から聞いた昔語りを書き記すという仮託的構想であり、高倉天皇・安徳天皇二代の歴史を記す。これらは麗女の代表作と認識されているものの、同時代における受容については俎上に載せられることがなかった。

しかし、このうち『池の藻屑』については曲亭馬琴の書簡中にその名が散見され、馬琴の批評が今日まで残っている。そこで本稿では、まず現代における麗女の歴史物語の評価を確認した上で、馬琴の評価についても検討し、『池

の藻屑』と馬琴の関わりについて検討したい。

一、麗女の歴史物語の評価

まず『池の藻屑』と『月の行方』の今日までの評価について述べたい。両作が世間に知られるようになったのは、明治十七年に『史籍集覧』⁽¹⁾に収録されて以降である。そして荻野由之氏は両作について次のように述べた⁽²⁾。

神武天皇から建武中興の初までは一通りありますが、その以降足利時代が無いからと云ふので、伊勢の神官荒木田氏の娘で麗女と云ふ人が、後に慶徳と云ふ人の所へ行つて慶徳麗女といふ、此人がそれを憂へて、増鏡のあとを書継いで池の藻屑と云ふ名を付けて、足利一代の国文歴史をかいた。不十分ながらも、徳川時代に歴史に筆を執つたと云ふ女流学者は、恐らく是が第一人であらふと思ふ、其点から此書の名前だけでも披露して置かうと思ふ。もと今鏡と増鏡との間に、高倉天皇、安徳天皇兩代の事実を書いた「彌世継」と云ふ本があつたのですが、それが滅びて伝はらぬ。そこで麗女は又「月の行方」と云ふ本を書いた、それは今鏡と増鏡との間に入るべき歴史です。

これに次いで、芳賀矢一氏が

月の行方は安徳高倉二帝の事をかき二卷ある。池の藻屑は十四卷で後醍醐天皇から北朝の天皇をかぞへて後陽成天皇にまで至つて居る。是は女の試みであつて、徳川時代の才女の筆であるから新しき材料もなく、文章も今日から見れば立派なものではないのは女性の補つたものであるから当然である。かくて四の歴史物語とこの二作とを加へると、神武天皇から後陽成天皇までつゞくのである。(略)歴史物語は大体かくの如く定まつて居るのである。

と評したことにより⁽³⁾、『池の藻屑』、『月の行方』は歴史物語の系譜の最後尾に位置する作品であると位置付けられることとなった。そして『大鏡』から連綿と続く歴史物語の空白期間を埋めたものと評価されるとともに、麗女の代表作と認識されるようになったのである。

しかし芳賀氏は、「是は女の試みであつて、徳川時代の才女の筆であるから新しき材料もなく、文章も今日から見れば立派なものではない」と述べ、内容面に関しては評価していない。また尾上八郎氏も、『池の藻屑』の内容について低評価を下している⁽⁴⁾。

大鏡にも、水鏡にも、増鏡にも、一篇の理想として見るべきものがあつた。それがあつたので、全体に生氣と、光彩とがあつたのである。しかるに、この書には、それと指して云ふべきものがない。たゞ列叙である、記録である。この外に何も無い。最後に、細川藤孝が、「やすみしる君がめぐみを世にうけてのこるくまなき春は来にけり。」といったのを挙げてあるので、これに至るまでの次第を叙して、天下の太平を祝したのであると云はれぬこともないが、それよりも、長年月の治乱興廢を順序に従つて、四鏡の如く書くのみが、著者の目的であつたといふのが、至当の如くみえる。これが、自分らの、聊か満足し能はぬところである。

これらによつて、現在においても『池の藻屑』、『月の行方』は歴史物語における空白期間を埋めたものとしての価値が評価されるのみで、文学作品としての評価は低いものとなつてゐる。そうした事情もあつてか、同時代における影響関係や受容層の問題などにまで目が向けられることはなく、先行研究は概説的なものや典拠研究が中心である⁽⁵⁾。

麗女の歴史物語に対する今日の評価は以上のようなものであるが、同時代においては馬琴が『池の藻屑』について

の感想や評価を、鈴門に連なる和学者小津桂窓に宛てた書簡で述べている。そこで、以下、馬琴による『池の藻屑』の評価について検討し、本作の馬琴との関わりを考察したい⁽⁶⁾。

二、馬琴の『池の藻屑』入手の経緯

『池の藻屑』は巻一「後醍醐天皇」、巻二「光厳院」、巻三「光明院」、巻四「崇光院」、巻五「後光厳院」、巻六「後円融院」、巻七「後小松院」、巻八「称光院」、巻九「後花園院」、巻十「後土御門院」、巻十一「後柏原院」、巻十二「後奈良院」、巻十三「正親町院」、巻十四「後陽成院」から成る。『池の藻屑』は元弘三（一三三三）年から慶長八（一六〇三）年までの出来事を扱い、巻名からもわかるように北朝天皇を歴代天皇として記載し、年号も北朝の年号を用いている。その執筆上の特徴は、尾上氏が

尊氏、義詮、義満をはじめ、秀吉、家康に至るまで、皆平安朝化せられて、武人らしからず、生まれながらの縉紳の様になつてゐる。「関白殿、はた花やかに、にぎはしきかたによりたまへば、とりもちてせさせたまふ事も、万おほやけしう、心ひろくおきてたまへるによりて、末が末までもうるほひわたり、宮の中こよなう今めかしうなれり。」とあるのを、何人が秀吉の事と思ふであらうか。

と述べるように⁽⁷⁾、戦国の歴史を書きながら、戦闘場面の記述を意識的に避け、さらに秀吉などの武人を雅やかな朝廷人のごとく描いている点である。また歴史書でありながら史実からの乖離が見られ、記述における文学的要素が強く、歴史書と文芸作品の性質を兼ね備える。そして戦乱の描写をつとめて避け、宮中における儀式等の描写に多く筆を割いている。

この『池の藻屑』を馬琴が入手した経緯であるが、小津桂窓宛書簡に次のように記される。

山田の麗女の事、はじめて聞知り候。仙台の真葛女同様之才女と被存候。真葛ハ氣象のミにて、学文ハ疎也。麗女ハ得がたき婦人にて有之、小野お通と対すべし。『池のもくず』『月のゆくへ』杯、いかなる事を書候哉、なつかしく覚候。これも御序之節、拝見奉希候也。
(天保三年十二月八日付、小津桂窓宛)

一、ひがき麗女之事、云云得御意候所、右才女著述の書名、『池のもくず』『月のゆくへ』杯之書と成り之事、あらまし御示教被成下、忝奉存候。右二書も、見まくほしく奉存候。(略)
麗女は詩文杯も出来候よし。左候ハ、井上お通など、伯仲すべき才女ならんと、なつかしく存候事ニ御座候。
(天保四年正月十四日付、小津桂窓宛)

こうした記述によると、江戸に住む馬琴が伊勢の麗女について初めて知ったのは、桂窓に教えられたことであつたらしい。麗女の没後二十六年目にあたる、馬琴六十五歳の天保三年のことである。なお、馬琴は麗女よりも三十五歳年少である。そして桂窓は麗女について説明するにあたって、現代と同じくその代表作として『池の藻屑』、『月の行方』の名を挙げたようである。

桂窓は伊勢の松阪に住み、自家の文庫西荘文庫に書籍を蒐集している。『西荘文庫所蔵目録』⁽⁸⁾には「檜垣麗女著述目録」という項目が存在し、『池の藻屑』、『月の行方』を初め三十種の書名が記されている。桂窓は麗女についても熟知し、その作品も多数所蔵していたことがわかる。

馬琴は麗女について、只野真葛(一七六三―一八二五)、井上通女(二六六〇―一七三八)、浄瑠璃「十二段草子」の作者と伝えられる伝説的な女性、小野お通と同様の才女であろうと想像する。そして「なつかしく」覚えてその著作に

も興味を示し、桂窓に借覽を願ひ出たのである。

三、馬琴による『池の藻屑』評

桂窓の紹介によつて麗女とその著作に興味を持った馬琴は、天保四年二月二十二日、桂窓から『池の藻屑』を受け取つた。

一、御借之御蔵書、二月廿二日二着。右、

『南朝紹運図』一冊、「無名旧記」一冊、「多氣行状記」三冊、「同国司九代略」一冊、「伊勢軍記」一冊、「同 真名本」二冊、「多氣往古図」一本、「白石手簡」四冊、「新安手簡」一冊、「同 拾遺」一冊、「新問答」一冊、「臥雲日件録」二冊、「池のもくず」七冊（略）

『池のもくず』の文章、女筆にハ手際なる物ニ御座候。『松蔭日記』と伯仲可致候。此書、「増かゞみ」の後編のつもりにて書あらハし候故にて可有之候得ども、帝系南朝ニ不及候て、後醍醐より直ニ後光厳をとりつけ候事、遺憾なきにあらず。よしや、「増かゞみ」の後編なりとも、こゝらは書やう可有候。女の事なれば、そこらへ心わたり不申なるべし。なほ、いづれも熟読の上、愚意申試たく奉存候。
(天保四年三月九日付、小津桂窓宛)

『池の藻屑』を一読した馬琴は、「女筆にハ手際なる物」であり、正親町町子（？一七二四）の『松蔭日記』と伯仲する作品であると評価している。しかし、『増鏡』後編を目指しながらも記述の中心が北朝方となっている点について遺憾に感じたたと述べている。『池の藻屑』は北朝を正統とする執筆姿勢で貫かれ、

芳野殿には去年より改まりて、延元二年とか聞えさす。

〔池の藻屑〕卷第三「光明院」

芳野の上はいつとなき太山の御住居に、秋の哀れさへ加はりて、身に入る風に故郷の寒夜も思召し知られて、世を思召す御心のいとまなきにうち添ひて、此の頃は吉田の大臣清忠の弁など、なくなりぬると聞かせ給へるにも、物心細う思召しつゞけさせ給ひて…

〔池の藻屑〕卷第三「光明院」

今年もいとく暮れて、応安も三年になりぬ。芳野殿には改まりて、建徳元年と申し侍る。

〔池の藻屑〕卷第五「後光厳院」

芳野の上は、二十八日御山を出でさせたまふ。

〔池の藻屑〕卷第七「後小松院」

と作中にあるように⁽⁹⁾、南朝方は「芳野殿」と呼称され、南朝天皇は「芳野の上」と記されている。『池の藻屑』の記述が北朝方を中心とする理由について、深澤鐔吉氏は次のように推測した⁽¹⁰⁾。

本書は其材料を所謂北朝方より得たるためにか、全く北朝の歴史にして、所謂南朝方をばこれを芳野殿と記す。

深澤氏は麗女が北朝方の資料を基にして執筆したため、その記述も北朝中心となつたのではないかとの見解を示している。しかし麗女が典拠とした資料は、『神皇正統記』『続神皇正統記』『増鏡』『太平記』『後太平記』『続太平記』『新葉和歌集』『吉野拾遺』『太閤記』『豊鑑』などであることが明らかになっている⁽¹¹⁾。現在典拠として判明している上記の書だけでも、南朝を正統とするものと北朝を正統とするものが混在しており、北朝方の資料を典拠としたため

に、北朝を正統とする記述になったと考えるのは穩当ではあるまい。また森安雅子氏は、

：南朝を正統とする考え方は当時にあつては世の通念に反するものであり、ごく一部の歴史家に限定される少数派の意見であつたと考えられる。故に、麗女が、北朝方の天皇一代に一卷を割り当てて『池の藻屑』を構成しているのも、近世中期頃の南朝時代に対する一般的な見解に従つた結果であつたと推測される。

と記しているが、その上で、

しかし、それでもやはり留意されるのは、後述するように、後世の南朝正統論の形成に思想面で大きな影響を及ぼした『神皇正統記』や水戸彰考館によつて編纂された著作との接点が作品中から確認できるにも関わらず、『池の藻屑』において北朝正統論が採用されている点である。

と不審を述べている¹⁰⁾。馬琴も麗女が北朝を正統としている点に違和感を覚え、『池の藻屑』入手のおよそ二カ月後の書簡中で、その理由を次のように推測した。

『池のもくず』、大冊のもの二付、写しかね候。かねても申候ごとく、女筆ニハ手際なるもの二候へども、書ものあしく候故、行れ申まじく候。『増かゞミ』杯ハ、国字の史類ニ御座候。それに擬して書つぎ候半ニは、一見識なくては行れがたく候半歟。南朝の事ニ不及ハ、第一の遺憾ニ御座候。乍然、世をはゞかり候てハ、左もあるべく候。北海の序に、出板のよしにて序するトあれば、出板のつもりなりけんが、事整ハでやみたるにもあるべし。はじめより出板の心あらバ、南朝の事に及ばざりしもさる故にや猜し候。いさゝかにても、世に媚候心ありてハ、見識ハ立られぬもの二候へバ、なつかしからず覚候。此手際に、何ぞ外の事をつゞり候ハゞ、あハれめで度ものならんを、をしき事ニ御座候。先比、水戸義公御贈官ありて、正二位大納

言を贈られ候。その御書付を拝見いたし候に、『礼義類典』等、大部の著述有之、この余も云云ニ付、折々御称美の御沙汰に付云云と有之のミ。『大日本史』の事ハ、一字も不彼及其義候。これにて御さつし可被成候。『俠客伝』杯、つくりものがたりとハいひながら、氣に入らぬ方も可有之候哉と存候事ニ御座候。(略)

『池のもくず』『いせ軍記』等も、筆工さへ埒明候へバ、写し置度なきにハあらねど、当時の様子にてハ、中々急ニ写し出来かね候。強て写し留候ニも不及候間、この分ハ熟覧のうへ、返上可致候。

(天保四年五月朔日付、小津桂窓宛)

傍線部のように、馬琴は『池の藻屑』に付された儒学者江村北海の序文から、麗女に本書を出版する意図があったのではないかと考え、南朝に関する記述がない理由を、出版に際して世を憚る故ではないかと推測する。北海の序文¹³⁾には

荒木田氏、中饋之間、益従事于其所好。覽涉愈々博、辞藻愈々纏。乃有著撰。積以歲月、無慮數十種。今所刻池藻屑、亦其一耳。

(荒木田氏、中饋の間、益其の好む所に従事す。覽涉愈々博く、辞藻愈々纏し。乃ち著撰有り。積むに歳月を以てし、無慮數十種。今刻する所の池藻屑、亦其一のみ。)

との一文があり、「今所刻」との記述からは確かに本書が出版を前提としているらしいことが確認できる。結局のところ『池の藻屑』は刊行されず写本のみで伝わったが、麗女に自作を出版する希望があったことはその自伝『慶徳麗女遺稿』¹⁴⁾に記される。

「桐の葉」「小手卷」などかきてより、つゞきてあまたかきあつめて、書林などにつかはしけれど、さのみめづらしくもあらぬものゆゑ、後にはなけば反古になしき。

麗女は自作の出版を望んで書林に持ち込んだが、その交渉は捗々しくなく、果たせなかつたものらしい。これらの点を考慮すると、麗女が出版を意図するが故に世評を憚って北朝方の記述を中心としたという馬琴の指摘には現実味があるのではないだろうか。馬琴は『池の藻屑』において北朝を正統とするのが、出版の便宜をはかつての「世に媚候心」によるものであることを看破し、そのようなことでは「見識ハ立られぬもの」と考え、「なつかしからず覺えているのである。「此手際にて、何ぞ外の事をつゞり候ハゞ、あハれめで度ものならんを、をしき事ニ御座候」との一文からは、麗女には「世に媚候心」がある故に歴史物語の執筆に向かないと考へていることが窺える。そして水戸藩主徳川光圀が正二位大納言の官位を得た際、『大日本史』において南朝を正統としたことに対する咎め立てが何もなかつたことを記す。次いで自作の『開卷驚奇俠客伝』（以下、『俠客伝』）も作り物語であるが、南朝の活躍を描くため、「氣に入らぬ方も可有之候哉」と述べている。徳川光圀や自身の堂々たる態度に比して、麗女の配慮を潔くないものと見ているのであろう。そして「筆工さへ埒明候へバ、写し置度なきにハあらねど、（略）強て写し留候ニも不及候」と手紙を結んでいることから、『池の藻屑』に対して積極的に筆写して手元に留め置くほどの価値を見出していなかつたことがわかる。

しかしこの後馬琴は、再度桂窓に次のように書き送っている。

一、『本朝水滸』後編、此節写させ候。并ニ、『池のもくず』、実ハあまり氣ニハ入不申候得ども、女筆の事ニて、且珍書ニ御座候間、これもうつし申度候。この二書、来月下旬迄ニハ写し終り可申候。

(天保四年十一月六日付、小津桂窓宛)

「『池のもくず』、実ハあまり気ニハ入不申」と述べているように、北朝方を中心とする記述から麗女の「世に媚候心」を感じ取って、低い評価を下した馬琴であったが、本書が女性の手になるものであり、また刊行されていない珍書であるという点には価値を見出していたようである。その後の桂窓宛書簡に、

今便返上之御蔵書、『本朝水滸伝』続編五冊、『池の藻屑』七冊、『梅桜日記』一冊、外ニ「多気城の図」、外ニ 貸進「告志編」一冊、『鬼神論』二冊

御恵借の御本、永々忝奉存候。いづれも、写し相済候間、今便返上仕候。着之節、御改、御入手可被下候。

(天保四年十二月十一日付、小津桂窓宛)

とあることから、馬琴は結局『池の藻屑』の写本を作成し、天保四年十二月十一日に桂窓に返却したことがわかる。

四、『開卷驚奇俠客伝』とのかわり

馬琴が『池の藻屑』を桂窓から借覧した背景には、麗女への興味の他に史伝物読本執筆のための資料蒐集という目的があったと考えられる。書簡中にもその名が見える『俠客伝』は、五集二十五卷二十八冊にも及ぶ長編の史伝物読本であり結局完結には至らなかつたものの、馬琴の自信作である。『日本古典文学大辞典』「俠客伝」の項¹⁵⁾には、

一集から四集までは天保三年(一八三二)から同六年に、五集は嘉永二年(一八四九)、大阪群玉堂河内屋茂兵衛刊。(略)南朝の遣臣の活躍を主題とした史伝物の一つ。

と記される。この『俠客伝』が刊行された時期は、馬琴が桂窓から『池の藻屑』を借り出していた時期と重なっている。横山邦治氏が

『美少年録』『俠客伝』という続きものを始めた時には、『弓張月』のように成り行きによって続きものになったというのではなく、馬琴らしく細密な構想を樹てた上で、『俠客伝』で申せば『女仙外史』や『好速伝』を読み込んだ上に、後南朝系の諸資料をも集めて、用意周到という状況で執筆を開始したに違いなかった。

と述べるように⁶⁶、馬琴は『俠客伝』執筆のため、この時期精力的に南朝・後南朝関係の書籍を蒐集していたと考えられる。徳田武氏も、天保三年八月十一日付殿村篠齋宛書簡の

一、南朝五部の書、并に『南朝紀伝』⁽⁶⁷⁾『南朝編年紀略』『同紹運録』等御蔵奔に付、御かしも可被成哉之旨御教示、尤忝奉存候。(略)世に「南朝五部の書」と申候は、『細々要記』『浪合の記』『南朝紀伝』⁽⁶⁸⁾『よし野拾遺』『桜雲記』は、尤疑しきもの候へども、近來の偽書にはあらず。なほなつかしきこゝ、ちいたし候。

との記述から、上記の南朝に関する書物が『俠客伝』の資料となつて指摘している⁶⁹。『池の藻屑』も南朝の分裂から合一に至るまで、そして後南朝の滅亡を描いているため、これらと同様に『俠客伝』の参考資料とする目的で借覧された可能性は高い。『西莊文庫蔵書目』によると、桂窓は『池の藻屑』と『月の行方』の両方を所蔵していた。それにもかかわらず、麗女の代表作である両書のうち『池の藻屑』のみを借覧していることは、馬琴が南北朝時代を描くための参考資料として『池の藻屑』に注目していたことを裏書きするだろう。

『池の藻屑』が『俠客伝』に直接的に典拠として利用されている形跡はないが、馬琴の南朝・後南朝史に関する知

識を構築する過程において、資料のうちのひとつとなっていたと考えられる。

おわりに

以上、一章では、麗女の歴史物語『池の藻屑』、『月の行方』が歴史物語の系譜の最後尾に位置する作品であると認定された経緯及び、今日における両書の評価を確認した。そして二章、三章では、『池の藻屑』に対する馬琴の評価について見てきた。馬琴は本書において北朝が正統とされている点を遺憾とし、その理由を出版に備えて世を憚るためではないかと推測している。そして麗女の「世に媚候心」のある執筆姿勢を惜しんでいる。

また四章では、馬琴が『池の藻屑』を借覧した時期、『俠客伝』執筆のために南北朝時代等について書かれた書物を積極的に蒐集していたことを確認し、『池の藻屑』もその内の一冊として馬琴の手に留め置かれたことを述べた。馬琴にとつての『池の藻屑』の価値は「女筆の事にて、且珍書」であるという点に集約され、内容に対する評価は芳しいものではなかった。しかし、本書は馬琴の史伝物読本執筆のための知識源の背景となつていると考えられる。

註(1) 近藤瓶城編『史籍集覽』第二冊、第三冊(近藤活版所、一八八四年)

(2) 荻野由之氏『史話と文話』(博文館、一九一八年)

(3) 芳賀矢一氏『日本文献学文法論歴史物語』(富山房、一九二八年一〇月)

(4) 尾上八郎氏「解題 池の藻屑」(『日本文学大系 第十三卷』国民図書株式会社、一九二六年八月。傍線は稿者による。

(5) 前掲注(4)、後藤丹治氏「慶徳麗女の歴史物語―月のゆくへを中心として―」(『瑞垣』二三、一九九五年六月)、船戸美智子氏「『池の藻屑』『月のゆくへ』―女流文学者の古典趣味―」(『国文学解釈と鑑賞』五四(三三)、一九八九年三月)、森安雅子氏「『池の藻屑』と軍記物語」(『岡大國文論稿』三三、二〇〇四年三月)、森安雅子氏「『池の藻屑』における南北朝史

- 観をめぐって」(『岡大國文論稿』三九、二〇一一年三月)が備わる。
- (6) 馬琴書簡の引用は、全て『馬琴書翰集成』第二卷(二〇〇二年二月、八木書店)、『馬琴書翰集成』第三卷(八木書店、二〇〇三年三月)に拠った。傍線は稿者による。
- (7) 前掲注(4)に拠った。
- (8) 『西荘文庫蔵書目』は関西大学図書館所蔵本(請求記号Z8C21029.9/1/3)を参照した。
- (9) 荒木田麗女『池の藻屑』本文は、尾上八郎氏校注『池の藻屑』(『日本文学大系 第十三卷』国民図書株式会社、一九二六年八月)に拠った。傍線は稿者による。
- (10) 深澤總吉氏「女流文学者荒木田麗女(下)」(『歴史地理』一八卷三号、一九一一年)。傍線は稿者による。
- (11) 前掲注(4)、(5)に拠る。
- (12) 前掲注(5)、森安氏論文「『池の藻屑』における南北朝史観をめぐって」に拠る。
- (13) 前掲注(9)に拠る。なお、江村北海序文の書き下しは稿者による。
- (14) 荒木田麗女『慶徳麗女遺稿』は、享和二年頃成立。本文は(大川茂雄氏・南茂樹氏編『国学者伝記集成(上)』復刻版、東出版、一九九七年九月)に拠った。
- (15) 『日本古典文学大辞典』「開卷驚奇俠客伝」水野稔氏執筆担当(岩波書店、一九八三年一〇月)
- (16) 横山邦治氏「『開卷驚奇俠客伝』略注」(横山邦治氏、大高洋司氏校注『新日本古典文学大系八七』「開卷驚奇俠客伝」岩波書店、一九九八年一〇月)。傍線は稿者による。
- (17) 徳田武氏「後南朝悲話―庭鐘・馬琴・逍遙―」(『日本近世小説と中国小説』青裳書店、一九八七年五月)

〔付記〕 本稿は平成二十四年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部である。

(くもおか あずさ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)